

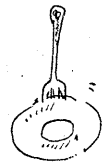
「終り」について —— 出合いと離別 ——

昨年の四月号で、わたしは「始まり」についての一文を書いたわけであるが、そこで今回は「終り」について書かなければならないはめになった。

その時に書いたことは、「終り」を感動的に迎えようとする時「始まり」が意味を持つていること、そして、そのためにはちょうど物語の作家がテーマを設定して綿密に演出を考えるように、われわれにとっては綿密な計画立案が必要であろうということであった。

本年度も、いよいよ一つの「終り」がやってきた。わたしはたち教育にたずさわる者たちにとっても、この三月は、やはり一年のしめくくりとしていろいろ考えさせられることが多い。四月に立てた計画が思い通りに出来たかどうか。自分のやったことは子どもたちにどんな効果を与えたか。ゆっく

田 中 祐 次



り反省したいことは山ほどある。しかしながら、このしめくくりは、またなんとあわただしい中にやってくることであろうか。三月に迎えるわたしたちの終りは、あの年末十二月のような忙しさとはかなり違うところもあるように思われるが、その中でも、退職や転勤、子どもたちの卒園や次年度への引き渡しということは、この時期特有の仕事のように思われる。つぎの担当者へのバトン・タッチのための文書作成や引き継ぎの仕事がドカドカとやってきて、そのために、ゆっくりに自分をふりかえることもできないでいるのが実情である。

ところで、こう考えてくると、この三月という月は、四月の「始まり」という月とあわせて、なんと人と人との別れや出合いの多い月であろうかと気づく。ためこんでいた仕事を片づけなければならぬのも、結局はそうした人と人との関

係の中でいやおうなしに生ずることのように思われる。

わたくしたちは、一生を通じて、出会いと離別をくりかえしている。このことは、古来から人々がとくに別離にあたって強く意識してきたことであるが、このことを心理学的に考察してみることはまことに興味あることである。

教師と子どもの出会いは、一般には物理的現象と見られるぐらゐ機械的であることが多い。時として人々には宿命とも感ぜられる。それゆえに、期待もあるし不安もある。子どもたちにとっては、どんな先生かが重大事であり、たしかに幼い子どもたちの運命を決することにもなりかねないことを考えれば、教師の責任は重いということになる。しかしながら、この出会いは教師にとつてもまた一つの出会いである。ただ、教師にとつてのこの出会いは、それを宿命として受けとめるだけではゆるされないということである。

よい出会いを迎えるためには、そのための事前準備も必要であり、そのための努力も大切である。しかし、それにもまして、出会い以後の関係の持ち方は重大である。人と人との出会いはたとえ物理的であっても、その結果生じた人と人と

のつきあひは、やがて心理的關係を發展させるものなのである。そして、出会いのよし悪しのほんどうの結果は、この心理的關係のよし悪しを見て判断されなければならない。

物理的に生じた出会いは、また物理的な別離を迎えなければならぬ。しかし、その間に生まれた心理学的な人と人の關係は二度と失われることはなくなる。それは時として、人の一生を通して残っていく。たとえ再会がなくなるとも、人は時に応じて思い起こし、その時その時に応じた影響を受ける。人の魂は、こうして永遠に生きつづけるものなのではなからうか。

こうした意味でも、「終り」はまた新たな出発である。そして、この出発のためには、やはり、「終り」は大切に迎えないければならぬし、そのためにはむすびの演出も時には重要なものではなからうか。

(信州大学)

原稿の到着が遅れて三月号に間に合いませんでしたが、

「出会いと離別」について四月に今一度思いを深めるのも意味があるのではないかと、今月号に掲載させていただきました。

(編集部)